
とある仮面の必要悪の教会（ネセサリウス）

スカイワッフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある仮面の必要悪の教会 ネセサリウス

【Nコード】

N0510R

【作者名】

スカイワッフル

【あらすじ】

主人公——ランスは必要悪の教会ネセサリウス所属の魔術師。

そしてその実態は『仮面ライダーヘラクス』だった。さらに彼は生まれつき『世界を渡る力』を有してる。

科学と魔術、ランスの師匠——天道総司とその他ライダーの境界線が今壊される。

注意「主人公はあまり変身しません。そしてオリキャラです。」

主人公紹介（前書き）

キャラ紹介です。
かなりチート能力です。

主人公紹介

注意「これはネタバレを含みます。」

ランス

性別「男性」

イギリス正教「必要悪の教会所属の魔術師。」

魔法名は『C e a r e | 5 3 6 (創造する者)』

18歳

身長は180cm以上で長身。

珍しく、真つ黒で長めのショートヘアの髪を持ち、青い瞳を持つ。

母がイギリス人で父が日本人と言う過程だった為このような姿になった。

実は『マスクドライダーシステム ヘラクス』を有する。

基本魔術は『風』を応用した魔術で十字架を使い、魔術を発動させる。

『ライダーの資格者』の為、生身でも身体能力は高めである。

生まれつきで、『世界を渡る力』がある。

性格は軽く、和みやすい。

上司である『最大主教』に忠実で彼女の前では礼儀正しくしている。

「最大主教様」と呼ぶほどである。

ローラには『有能かつ忠実で理想の部下』として評価されている。

『師匠の教え』で料理もなかなか上手い。

マスクドライダーヘラクス

【身長】 197センチ

【体重】 100キロ

【パンチ力】 約4トン

【キック力】 約7トン

【ジャンプ力】 ひと跳び約37メートル

【走力】 100メートルを5.4秒（クロックアップすれば1秒以下）

変身ツールであるヘラクスゼクターをブレスレットにはめる事で変身できる

モチーフはヘラクレスオオカブト。基本カラーは銀色。

ゼクトクナイガン ガンモード / アックスモードを携行し、距離を問わずバランスのとれた戦法を得意とする他、マシンゼクトロンの操縦にも長ける。

必殺技のアバランチブレイクはライダービートで腕力を強化して使用される。

マスクドライダーシステム

「マスクドライダー」に変身するために必要な特殊戦闘システムの総称。違う世界の組織、ZECTにより開発された。いわゆる“武装装着型”のライダーに分類することができる。

ヘラクスゼクター

ゼクターはライダーへの変身に必要なツールであり、自己判断能力を持つ昆虫型コア。

有事の際にはその資格者の元ヘジウントで移動、資格者が身に付けた変身ツールと合体することで、資格者をライダーへと変身させる。

召喚時にはゼクター自ら敵を攻撃することもある。自由意志が高く、ランスや他の仲間に関わりたりする事もある。

クロックアップ

超高速の特殊移動方法。各ライダーフォームが、体を駆け巡るタキオン粒子を操作し、時間流を自在に行動できるようになることで行う。

ライダーは腰部のベルトにあるスイッチに触れることにより発動す

る。

クロックアップを発動したライダーは超高速での移動が可能となる。

クロックアップの特徴

タキオン粒子の流れる目でなければ視認することはできない。

ライダー側から見れば、クロックアップ中は自分たち以外の時間がほぼ止まっているに等しい。

長時間のクロックアップは装着者に負担が掛かるため、ゼクターが自動的にあるいはライダー自ら解除する。

ライダー及び専用バイクは、クロックアップ発動時には「Clock Up」、解除時には「Clock Over」と電子音声で発声される。

クロックアップが解除された後に再度クロックアップを発動することとで、連続してクロックアップ可能。

時間軸が乱れる（ライダーシステムの角や額にあるOシグナルによって感知される）

世界を渡る力

ランスの生まれつきの能力。

灰色のオーロラを出現させ、その中に入る事で『違う世界』に行く

事ができる。

ヘラクスゼクターは『違う世界』で手に入れたらしい。
現在はあまり使わない。

世界の渡る力の暴走

この力を暴走させると、違う世界の人物、産物などを自我とは関係なく『この世界』に呼び寄せる。

暴走すると、体に物凄い負担がかかる。

ランスの恩師、『ローラリスチュアート』

彼は13歳の時生まれつきの『世界を渡る力』を暴走させてしまい、
重傷を負う。

だが彼女に何らかの魔術で回復してもらった為、彼は恩を抱いている。

ランスの師匠『天道総司』

ランスが17歳の時『違う世界』で知り合う。
顔立ちが良く、自分の事を

『天の道を往き、全てを司る男』と言っている。
俺様キャラで、料理の腕も『プロ以上』である。

実は彼もライダーであり、『マスキッドライダーカブト』に変身する。

「おばあちゃんが言っていた…」というセリフの後、祖母の教えを口にする。これらの格言は「天道語録」と呼ばれる。プロ級の腕前である料理をはじめあらゆることに精通するが、自分より優れた料理の腕を持つ相手には敬意を払う。彼は『違う世界』で活躍し、世界を救った事もある。ライダーでも、生身でも戦闘能力は高い。

違う世界のヘラクス

織田^{おだ} 秀成^{ひでなり}が変身する。

23歳。自由を求めてZECTに反旗を翻したネオゼクトのリーダーとして、かつての仲間達を相手に激しい戦いに身を投じる。年若く破天荒だが、ライダーとしての器を備えており、自らの存在を売り込む天道の実力を評価し、一方でその心中に秘めた闇を見透かしながらもネオゼクトに招き入れる。

世界が違う為、ランスとは直接繋がりはないが……。いつか二人が交差する日が来るのだろうか……。

風の魔術

十字架に魔力を込める事で発動出来る。風を使い、空中を飛ぶ事ができたり、風の気流を活発化させ、剣にするなど戦術は様々である。

主人公紹介（後書き）

ランス「俺は俺でしかねない。これが俺なんだ・・・。」

ステイル「いや、当たり前だよ」

神裂「生まれ持った力がある・・・。私と同じですね。」

任務―禁書目録の搜索（前書き）

ランス「とある仮面の必要悪。始まり始まり」

ステイル「変な始まりかたは止してくれないか・・・。」

神裂「昔話っぽくて良いんじゃないですか？」

ステイル「何処が!？」

任務―禁書目録の搜索

ここはロンドンの必要悪の教会ネセサリーウスの男子寮。

そして、俺こと――『ランス』はさっき起きたばかりで着替え終わった頃であつた。

何かと言えば、眠い。

その時俺の携帯から音が鳴り響いた。

「もしもし、アークビショップ最大主教様？」

『ランス、急だけでも、すぐ来て欲しけるのよ。』

「・・・何かあつたんですか？」

早速の呼び出しにさっきまでの眠さが吹っ切れた気がした。

『禁書目録が消えたのよ』

その言葉に俺は動揺した。

禁書目録、それは十万三千冊の『魔道書』を記憶する少女だ。

そして俺の同僚で仲が良い仲間『だった』。

俺達が彼女の記憶を消すまでは・・・。

俺はバイクに跨り、すぐ最大主教様が居る『聖ジョージ大聖堂』に向かう。

聖ジョージ大聖堂――

「と、言う事で早速、重大任務を発表するわね。」

身長約2・5倍という非常に長い金髪の持ち主の女性で18歳くらいの容姿の女性、

この方は最大主教こと『ローラースチュアート』。俺が最も尊敬する『恩師』だ。

俺はこのお方に返しても返せない恩があるのだが、詳しい説明は後で説明する事にしよう。

「貴方はステイルと神裂と一緒に『学園都市』へ行って禁書目録を回収を頼みたい所なのよ。」

「解りました……。あ、ちょっと良いですか？」

「？。何か？」

「彼女の頭の中は『記憶』ではなく、『魔力』で圧迫されている事をステイル達には言わなくていいんですか？」

「……。なるべくその事は伏せてもらいたいけれども。隠しきれなかったら、別に言っても構わないわ。」

「そうですね。つまらない余談をして申し訳ありません。」

「別に誤らなくても……。」

「それでは、これから二人を連れ、学園都市に潜入します。」

俺はは男子寮と女子寮を周り、それぞれステイルⅡマグヌスと神裂火織を呼んだ。

そして現在俺は学園都市に行く為『空港』にいるんだが・・・。

ステイルは銜えていた煙草をペツと吐き捨てる。

「・・・・あの娘こが・・・・。」

ステイル悔しそうに言う。無理もないだろう。

「って、ポイ捨てかよ。まあどうでも良いや。ああ、逃げた。まあ、予想はしてたがな。」

俺は罪悪感も悔しさも無い言葉を放った。

「ランス。貴方は、心が強いんですね・・・。」

俺の言葉を聞き神裂は険しい表情を浮かべる。

「……そうでもねえよ。」

俺は笑いながら返答した。だが表情とは裏腹に、心に違和感を覚える。

『何故こんな状況で自分が笑っていられる?』……と

その答えは今の俺には解らない。

俺は取りあえず話を進める事にした。

「さあて。飛行機がそろそろ来るぞ。……あと神裂、その刀、隠しておけよ。金属探知器に引っかかるから。」

時は進み日本の『学園都市』の空港にいる。

俺は荷物を取ると、早速荷物の中から『ヘラクスゼクター』を取り出す。

「禁書目録を探せ。」

『キュイウィン』

電子音と共にヘラクスゼクターは飛び去って行った。

そして早速ステイルに指令を出す。

「じゃ、皆。解ってるな。」

俺はこの一言だけに目に見えない重みを掛けた。

それに対し二人はコク、と頷く。

さあ、ショータイムだ。

任務―禁書目録の搜索（後書き）

ランス「流石 最大主教様 頭領らしい振る舞いだ。」

ステイル（あの女狐め・・・。）

神裂「最大主教の事をここまで褒めれるのはランス位しま居ませんよ・・・。」

探索と変身（前書き）

ランス「なあ、ステイル」

ステイル「何か用かい？」

ランス「なんでお前は未成年なのに煙草吸ってんだ？」

ステイル「煙草がなきゃ僕は今頃生きていないさ。」

ランス「・・・・・・・・・・」

探索と変身

ランスは禁書目録の搜索の為、ヘラクセクターの報告を元に探した結果、

俺は今、禁書目録を追っている。という状態だ。

「おい、いい加減諦めたらどうだ。『インデックス』。」

ランスは禁書目録をビルの屋上に追い詰める。

「嫌ッ！」

「何でだ？」

「・・・・・・・・。。。」

沈黙、の末ランスはため息を吐く。

「何でだ？なんで俺達を拒む。インデックス、お前は十万三千冊を記憶している。外部の組織や魔術師に狙われる可能性も有るんだぞ。」

「・・・・・・・・。」

「ま、どの道お前は此处で捕まってもらう。そうして早く戻るんだ。」

だがインデックスはそう簡単に諦めなかった。

彼女はビルから飛び降りる。

「なっツ。」

ランスは彼女の予想外の行動に驚愕した。

だがすぐ彼の思考は回復する。

（・・・まあ、歩く教会のおかげで怪我する心配は無いか。）

と彼は彼女の落ちた場所を見降ろす。

運の悪い事に、彼女が落ちた所は人の家のベランダだ。

いくらなんでも彼は一般人の家に入る気にはなれなかった。

（しばらく様子を見るとしますか。）

時は経ち、此処はインデックスが落ちたアパートの向かいのビルの屋上。

ここでランスはステイルと神裂達と合流する。

「インデックスは見つかりましたか？」

「見つけたが。インデックスの奴、一般人のベランダに逃げるなんて……。」

「大体事情は解ったが、さてどうした物か……。こっちの事情に一般人が関わるのは避けたいんだが。」

「無論、俺も同意見だ。だがインデックスもそう思ってる。」

「「？」」

二人はランスの言葉に疑問を感じる。

「インデックスは魔術の世界に、ましてや『科学』側の一般人を巻き込む気は無いと思う。いや必ずそう思ってる。アイツはそういう人間だ。」

その説明に二人は納得した。目茶苦茶な判断だがその言葉に説得力があった。

「……確かに。インデックスは優しい性格ですからね。」

「そうなら好都合だ。仕事が面倒にならなくて済む。」

「じゃ、早速。……人の家を覗く趣味なんか無いが。」

ランスは懷から、イギリス製の双眼鏡を取り出す。

それでインデックスが落ちた部屋を覗こうと言う魂胆だ。

「あ~~~~~。…………。」

ランスと神裂は様子を窺う。

余談だが神裂は視力が8・0のである為、双眼鏡を使う必要があまり無い。

ランスと神裂が見たのはインデックスが包丁を振り回している姿。

「……何やってんだ……。アイツは……。」

ランスが呆れる一方。神裂も呆れている。

ステイルがこつちをゆっくり振り向く。

「どうかしたのか?。」

「ダイジョブダイジョブ。ちょっと荒っぽくなったただけだから。」

「?。」

すると突然ランスの傍にヘラクセスゼクターが駆け寄る。

『キュイウンキュイイイン』

「んだよ、ウルセエな。」

『キュウンッ』

ヘラクスゼクターはこっちに來い、とジェスチャーと送る。

「今は仕事中。また後でな。」

『キュウウウウイイイイイインッ』

ヘラクスゼクターが放った爆音でそこに居た3人は驚く。

「ダッ！るせい！解った！行けばいいんだろ！行けば！」

「ど、何処へ行くのですか？」

「ほっとけ。どうせ理由も無いんだろっし。」

「悪いな。なんかあったら連絡くれ。」

とあるビル――

此処はビルの地下。

地下であるため、水道やガスなどを繋ぐパイプが張り巡らさせている。

「なんだよ。此処は、」

そこでランスは『何か』と見つける、

その『何か』にランスは眉を顰める。

ランスが見たもの、それは――

――死体。

恐らく、此処の管理人だろう。

そして次にランスは死体より『恐ろしい』物を見た。

それは緑の卵状の透き通った物で、中には怪物のような得体の知れない者が入っていた。

それは10個程あった。

しかし、ランスはこの不気味な物体に見覚えがある。

「ワームの……卵!？」

ワーム――それは他の世界の化け物。その世界でワームは

隕石に内包されて地球に飛来した地球外生命体であり、地球上に棲息する虫・甲殻類に似た外観・特性を持つ

高度な知性と後述する特殊な形態・能力を駆使し、密かに人間を殺害しながら繁殖し続けている。そんな存在だった。

だがそれが『この世界』にある。ランスは驚愕したが彼にそんな暇は無かった。

突然、人が現れた。

しかし、その人間はランスの横で倒れている人間と全く瓜二つだった。

ランスは男を睨めつける。

「おい、ワーム、なんでこの世界にいる。」

「お前、俺達の事を知ってんのか？」

ランスの質問に不気味な笑みを浮かべながら答える。

「ワームがなんで此处に居る。」

「ふ、フハッハッハはっはっはハハっはハアッッ」

ワーム、である男は狂った様に笑った。

悪魔の笑い声と言っても過言では無い。

「答える必要があるか？答えは『NO』だ。何せお前はこれから死ぬんだからなあ！」

男の体が緑色に発光する。姿は段々、『クモ』に似ている青い『化け物』と変わっていった。

しかし、そんな状況で彼の表情は――

「・・・ハッ。残念だが死ぬのは『貴様』の方だ。」

『余裕』で満ちていた。

その言葉に化け物はランスの頭を疑った。

「馬鹿か、この状況はお前を『死』に誘っていると言っ事も解らんのか。」

「しょうがねえな。信じられないなら『徹底的』な証拠を見せてやる。」

ランスは右手をワームに見せつける。

「ッッ。それはッ！」

ランスの右腕にはすこし大きいプレスレットがはめてあった。

「やっと解ったか。雑魚。」

すると外に待機していたヘラクスゼクターがコンクリートの壁を突き破ってランスのプレスレットに向かった。

ヘラクスゼクターはプレスレットに斜めの状態でカチッとはまった。

そして

「変身」

彼はヘラクスゼクター腕と平行な位置までスライドさせる。

そして

『Henshin』

電子音と共に彼の体は右腕を中心にスーツが出現した。

そのスーツはランスを包みこんでいった。

『Change Beetle』

その姿はヘラクレスオオカブトを思わせる姿で銀色であった。

右腕にゼクトクナイガンを握っている。

「さ、ショータイムが始まるぜ。」

「ら、ライダーだとッ！くそッ」

ワームは焦りながら、超高速で行動できる『クロックアップ』を発

動させた。

だが『マスクライダーヘラクス』はベルトの腰に手を当てスライドさせる。

『Clock Up』

つぎの瞬間、ヘラクスから見て時間が止まったのに等しい状態となる。

そう、彼も超高速の移動、攻撃ができるのだ。

「クッソがあああああああッ！」

ワームはヘラクスに突っ込んできた。

そして彼は、

「フンッ」

クナイガンをストックスモードに変え、ワームを斬り付ける。

刃がワームの体を削り取り、火花と緑の液体がワームの体から飛び散る。

「うぐあッ」

ワームはダメージを受けながらもヘラクスから距離を取った。

が、それに対し、ヘラクスはクナイガンでガンモードに変え、『セレクトター』を『セミオート』に切り替える。

そして銃口がワームに向き、彼はトリガーを引く。

バシユン、と光弾が発射され、ワームに直撃した。

「ガハッ」

赤い火花が散る。

さらにヘラクスはセレクトターを『フルオート』に変えトリガーを引いた。

クナイガンから紅い閃光が放たれる。

それは狂いも無くただ真っ直ぐワームに向かう。

「ガアアアアア、アアアアアアッッ！」

その閃光はワームを捕らえる。

ワームの体力はもう限界に近かった。ならば最後の力で奴を殺すしかない。とワームは考えた。

ワームの左腕に自分の『全て』とも言える力が集まり青く発光する。

ワームは敵に突っ込んでいく。

「クッ……。くらええええエエエエ！」

それに対しヘラクスは

「哀れだな、ワーム。」

冷徹な声で言い放つ。その言葉に感情など一切無かった。

ヘラクスはヘラクスゼクターを180度スライドさせる。

『R i d e r B e a t』

彼の右腕に『タキオン粒子』が溜められ　それが力に変換される。

ワームが『最大の一撃』を喰らわせようと、腕を振り下ろすが、ヘラクスは華麗に避けた。

「しまっ——！」

ヘラクスはワームの背後を取る。

「終わりだ。」

彼はクナイガンの刃をワームの肩に深く斬りこんだ。

「ウグウッ」

それだけでも化け物にとって激痛だった。が攻撃は止まらない。

「オラアアアアッ！」

ヘラクスは刃をくい込ませた状態からクナイガンをつームの左肩から右足に掛けて一気に振り下ろす。

「ッ——」

その斬撃が生んだ痛みにつームはもはや声すらでない。

そしてつームは『原子破壊』され跡形もなく、爆発し消え去った。

その後にはそのつームの肉片は残らない。あるのは生々しい戦いの跡だけだった。

「あんな口叩いておきながら、結局小物じゃねえか。」

ヘラクスはそう言いながら、クナイガンをガンモードにし、残ったつームの卵を駆除した。

（なんでワームが居る？違う世界に居るはずなんだが……。ま
後で考えよう。）

ランスにとっては ワームの存在より 任務の方が大切のようだった。

「さあゝて。ショーは終わったし、任務に戻るとするか。」

ヘラクス、いや、ランスはさっきとはまったく別人のように、陽気に言う。

ランスが外に出た時はすっかり夜だった。

「めんどくせえから『クロックアップ』戻るか。」

ランスは腰のスイッチをスライドさせる。

『Clock Up』

ランスはさらに『風の魔術』を使い、空を『超高速』で飛びながらステイル達が居た場所へもどる。

例のビルの屋上――

ランスはわずか10秒足らずで、屋上へ戻った。（今は変身を解いている。）

だがランスを待っていたのは。

「・・・なんじゃこりゃ。てかなんじゃそりゃあ!？」

どっかの最強さん みたいな口調で叫ぶ。

何故なら、ステイルが見事にぶっ倒れていたからである。

「おいおい、ドッキリとか無しだぜ?」

ステイルは結構優秀な魔術師。そこいらの学園都市の能力者などに負けるはずが無いのだ。

なのに彼は倒れている。誰かにやられたと言う事が聞かなくても分った。

「インデックスの回収を何者かに邪魔された様です……。インデックスが居たアパートで倒れていたので運んだんですが……。」

「ドッキリ、では無さそうだね。」

「う、うぐ、」

ステイルが目を覚ます。

「おい、ダイジョブか？」

「……大丈夫でもじゃなくても、同じだろうに。」

「……まあな。」

「ステイル。」

神裂が尋ねる。

「一体、何があったんですか？」

「色々ありえねえな。魔術が『打ち消させる』なんてよ。第一、お前を一発殴るだけで気絶させるなんてよ。」

「いずれにせよ、その少年はインデックスと関わった事により、魔術と言う『キーワード』を知ってしまった可能性もあります。」

「

ランスはニヤリと笑う。

「まあ良いや。邪魔になるなら、——倒すだけだな。」

さっきまで一般人には手を出さないつもりだったが、彼はそう言った。

「目には目を、歯には歯を。その少年が邪魔するなら、こっちも『邪魔を邪魔』する。」

『キュイーン』

何故か、傍にいたヘラクセスクターが鳴く。

「君も、パートナーのやる気みたいだね。」

「ま、でもやる前にあれだ、あれ。」

「・・・あれと言われましても、そんなの夫婦間でも通じませんよ。」

「ちゃんと言葉を使え。」

ステイルと神裂は悪態を突いた。

「あれって言ったらあれだよ。宿泊場所だよ。流石に今日で全ては収まる事はできねえから。」

「確かに、インデックスは一般人の家に居る様だしね。」

「土御門に案内してもらっては？」

「そうか。その手があったんだ。」

探索と変身（後書き）

ランス「なあ、神裂。」

神裂「はい？」

ランス「神裂ってさ、俺と同じ年だよな？」

神裂「そうですが・・・？」

ランス「なんで18歳でそんな格好してんだ？」

神裂「あ、あのこれはですね」

その後長い説明が続いた――

上条当麻（前書き）

ランス「ステイル、神裂。」

「「？」」

ランス「俺たち、仲間だよな。」

ステイル「な、何をいきなり、」

神裂「ランス？」

上条当麻

時は流れ、7月24日

ランス達は上条達が居る二階建てのアパートをビルの屋上からみていた。

「ランス。一つ尋ねても良いですか？」

神裂はランスに尋ねる。

ランスはゆっくり首だけを神裂に向ける。

「あなたは最大主教に特別扱いされている様ですが、あなたにとって、どう感じてるのですか？」

ランスは「フッ」と笑い目を閉じる。

「俺は正直にありがたい。それほど最大主教様に信頼させていると考えると、さらに嬉しくなってくるよ。」

「……ではインデックスを救える方法などは……聞かされたりしていますか？」

神裂は目を細め、斜め下を向いた。

その表情は髪に隠れあまり見えなかったが、何やら見ていて悲しくなる様な表情だ。

「……聞かされていたとしても、それは秘密事項だ。」

ランスは声を低くして呟いた。

それは、どちらかと言うと独り言に近い。

「だが言えるとしたら、アイツは『自分から』禁書目録となる事を誓った。と言う事だけだ。」

だから、俺は今は無きアイツの記憶でもその思いは無駄にしたいく無い。」

「そうですね……。」

そしてランスは開き直ったように表情を明るくした。

「それよりお前等 腹減っただろ？弁当買ってきたから食べよ。」

「ま、それもそうだね。」

ステイルと神裂は市販の弁当をランスから受け取る。

そんなグダグダ、なのか切ないのか、理解不可能な時間が続く。

時は流れ景色は夜景が綺麗な夜となっていた。

「何処に行くんだい？ランス。」

「あの少年と一緒にシヨールを始めたい。もちろん文句は無いよな。ステイル、神裂。」

ランスは拳をゴキバキと慣らしながら言う。

「それならば、私たちも行きますよ。」

「僕の言った方が良いかな。派手な事をやるなら、人払いも必要だろう?」

魔術師達と敵対した少年――上条当麻

彼は夜の街を歩いていた。

ちなみに彼の体は何やら噛み後がいくつもあつた。

「たく、噛んだら噛んだで さっさと行きやがって。」

そして上条が横断歩道を渡り終わった瞬間、人氣が無くなり、信号の電氣が消える。

「ん？あれ……。」

彼は周りを見渡すが誰も居ない。さっきまで通っていた車すら無い。

「人が……、居ない？」

そんな中、二つの影と足音を上条は感じ取る。

「ルーン」

上条は突然 聞こえる声に反応し声の主を見る。

そこには、 すこし露出が多い奇妙な服と 2メートル以上ある刀を持った女性と

身長が明らかに 180cm以上あり、黒い皮ジャンに ゴツゴツしたブレスレット と十字架をまとった男が現れる。

「人払いのルーンと使っているだけですよ。」

上条は 警戒する。

「神裂火織と申します。」

女性——神裂は静かな声で言う。

「俺はランスだ。」

二人は自己紹介をした。

「できればもう一つの名は 語りたくないのですが……。」

上条は『もう一つの名』を聞き、疑問を抱く。

「もう一つ……?」

「神裂が言ってるのは『魔法名』の事だ。」

「ッッ！」

上条は確信した。この二人は魔術師、だと。

「あいつと同じ——魔術結社の……」

「率直に言います。魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが……」

上条が拳を握りしめる。

「嫌だと言ったら……ッ！」

「だったら しょうがねえな。一般人を巻き込む気は無かったんだが、」

男――ランスは手を 胸の十字架に触れ上条に向ける。

「『風は空を駆け、突き抜ける』……。」

ランスは呟く。

その瞬間――何かが上条の両脇をすり抜け、背後に有った風車のプロペラが綺麗に斬れ、

その破片が通勤路付近の ガラスに突き刺さる。

「さあて、諦める気になったか？」

「何……言っただけ……。」

上条は足が震えるを自覚しながらも言う。

「デメエ等を相手に・・・降参する理由なんか・・・ッ」

「何度でも言います。」

今度は神裂が刀に手を触れた、その途端 何かが上条を斬撃が襲う。

「うぐうッッ」

その斬撃は上条の立っている地面を削りとる。

致命傷は避けてくれた様だった。と言うよりこれは見せしめ みたいな物だった。

「・・・さっきも言ったが諦める気になったか?。」

（畜生、一発の見えなかった・・・。）

（だけど、この右手なら。）

彼は幻想殺しが宿る右手を握る。

「ステイルから聞いた。お前の右手は、何故か『魔術を無効化する』
だがそれは『右手で触れなきゃ』意味ねえと思うがな。」

「チ、クチヨオツ」

上条は覚悟を決め、ランスの方に突っ込んで行く。

だが、彼は何処から出したか不明だが、彼の手中には銃器――ゼク
トクナイガンが握られていた。

ランスはトリガーを引く。

紅い光弾が上条の足元に当たり 地面が破壊される。

「うああっ」

上条は足を止める。

「甘いなッ」

ランスは上条の目の前に突っ込む。

彼は拳を握り上条を殴り飛ばす。

ドゴツ、という音が上条の脳内に響いた。

「がああッ」

彼は地面に転げ落ちた。

強烈な一撃だった為、口が切れ 舌が鉄っぽい味を感じ取る。

そして上条はランスの予想外の行動に驚いていた。

彼は敵が『魔術』で攻撃してくると思ったが ランスは銃火器と拳で攻撃してきた。

「お前等、魔術師じゃ無かったのかよ」

「言つとくが俺達は魔術を使わずとも お前を殺せる。俺達にとっては『ショータイム』すら始まって無い。」

「それどころか私達は魔術名すら 名乗っていませんよ。」

「つか、さっさと諦めてくれないかなあ。俺達は彼女の思いを無駄にする気は無いんだけど。」

「・・・何言つてやがる・・・。テメエ等は幼い女の子に 寄つてたかつて 血まみれにしてんじゃねえかッ！」

「・・・・・・・・。俺はお前みたいな奴、嫌いじゃ無いんだが・・・・・・・・。」

困っている人が居れば助ける、人間としては好きな方だ・・・・・・・・。

解るぜ、お前の気持ちは、・・・・だが――

こっちの事情でお前が『死ぬ』事になると、こっちが後味が悪くなる。彼女は死ぬわけじゃ無い。

保護するだけだ。

まあ、はっきり言っちゃえば、彼女はこうなる事を『自ら』望んだんだ。

俺達が勝手にこんな残酷な役目を 与えた訳じゃないんだよね。」

ランスは ニヤニヤしているのか 悲しんでいるのか 解らない表情を浮かべる。

「『後味』なんて、テメエ等の勝手な 理屈だろおが！

第一、じゃあなんでインデックスはテメエ等から逃げてんだよ！」

「こつちだつて悲しいんだ。『同じ組織に所属していながら、恐れられているって現実』がな」

それを聞いて彼は驚愕し訳が解らなくなった

「じゃ、じゃあ、アンタ達は 同じ組織に所属していながら なん
でインデックスに『悪い魔術師』って言われてんだよ！」

それとも何か？インデックスが俺を騙したって言いたいのか？」

「彼女は嘘を突いてはいませんよ。私たちが同じ必要悪の教会と
言う事も 自分が追われてる本当の理由も……」

何も覚えていないんです……。

だから自分で判断するしか無かった。」

神裂は自分で言うておきながら悔しくなっていた。

「自分を追ってくる魔術師は 十万三千冊を狙う魔術結社の 人間
だと思っのが 当然だしな。」

ランスが続けて説明した。

「けど、インデックスには『完全記憶能力』 あんだろ？！そのその、
なんでアイツは一年前の記憶が無いんだ？」

「私たちが、彼女の『記憶を消した』からです。」

上条は驚きのあまり黙りこんだ。

そして彼は恐る恐る口を開く。

「お前等が……消した？」

「はい」

「魔術で消したのか……ッ」

上条が言った言葉を聞き、ランスと神裂は一瞬 目を斜め上に逸らす。

「アンタ等はインデックスの仲間だったんだろ！」

アンタ等にしたってインデックスは大切な仲間なんじゃ無いのか！
！だったらどうして！？」

「そうしなければならなかった。」

「!？」

「そうしなければ、彼女は死んでしまうんです……。」

「インデックスは脳の85%が、魔りよ……じゃねえや。

魔道書で埋め尽くされてる。残りの15%は記憶に費やしてる。よって彼女は記憶を消していかなえと

脳が『パンク』しちゃうんだ。しかも『完全記憶能力』のせいで脳の消費が速くなる。

だから消したってワケ。後インデックスは俺達と同じ組織に所属している。だから、殺す気の無いし殺してのこっちの損になるだけだしね。OK？」

（あぶねえ、もうちょっとで真実を言ってしまう所だった……）

ランス落ち着きながらは説明していった。（実は冷や冷やしていた）

「……そんな。

き、記憶を消す以外に方法は……？」

「ありません。」

「何時までだ・・・」

「三日後だ。」

「・・・三、日？」

「俺達はインデックスを傷つけるつもりはコレツポチも無い。」

むしろ、俺達じゃなきゃ救えない。だから引き渡せ。俺達が本気を出す前にな。

それに、記憶を消せば彼女はお前の事は覚えて無い、気が楽になるぞ？

第一、彼女を助けたって、何の利益にも残らない。」

「ふっざけんなッ!!」

「「!?!」」

「あいつが覚えてるとか 覚えて無いなんか関係あるかッ。

解んねえなら一つだけ教えてやる。」

上条は傷ついた右手を握りしめる。

「俺はインデックスの仲間なんだ！

今までも これからも アイツの見かたで有り続けるって決めたんだ！

聖書に書かれて無かったって、絶対にそうなんだよ！」

「「.....」」

「何か変だと思っただぜ・・・ッ

単にアイツが忘れてるだけなら 全部話して誤解を解けば良い話じゃねえか！

なんで誤解したままにしてんだよ！なんで『敵として』追い回してんだよ！

テメエ等なんで何勝手に見限ってんだよ！アイツの気持ちをなんだと——ッ」

だが上条の言葉は最後まで続かない。

「うっせんだよ　ど素人がッッ！」

神裂の咆哮が炸裂した。

その叫びに上条は驚く。

「知ったような口を聞くなッッ！」

今度は神裂が拳を握る。

「私達いままで、どんな気持ちであの娘この記憶を奪ってきたと思ってるッ！」

貴方はステイルを敵視している様ですが・・あれが、一体どんな気持ちであの娘と貴方を見ていたと思ってるんですかッ?!

どれ程の決意の元に『敵』を名乗っていいのか・・・。

大切な仲間の為に泥をかぶり続けるステイルの気持ちだが、貴方なにかに解るんですかッ!?

神裂は、高くジャンプし、上条に飛び蹴りを放つ。

「うぐッッ」

その攻撃はランスの放った拳より強力で、何より重かった。

上条は転げ落ち 仰向けに倒れる。

「私だって頑張った!ランスだって頑張ったッ!」

神裂は叫ぶ。

彼女はまた高くジャンプし、刀のさやの先で上条の居る場所に突きつける。

上条はギリギリ避けるが神裂の攻撃は終わらない。

彼女は刀で彼を斬らず さやで叩き続けながら言う。

「春を過ごし、夏を過ごし、秋を過ごし、冬を過ごしッ。

思いでを作って忘れないように、たった一つの『約束』をして！
行き有る場を胸に抱かせて！」

次の一撃は上条を襲わず刀を 彼の横の地面に振り下ろす。

「それでも・・・ダメだったんですよ・・・。一から思いでを作り直して、何度それを繰り返しても・・・ッ

家族も、親友も、恋人も・・・全てがゼロに変えられる・・・
私たちはもう耐えられません。

これ以上、彼女の笑顔を見続けるなんて・・・不可能です・・・
ッ

彼女は息切れしながら言う。

だがそれに対し上条は――

「ふっ、ざけんな・・・ッ」

「・・・・・・・・ツ」

「んなもん、テメエ等の勝手な理屈だろうがツインデックスの事なんか一瞬も考えてねえじゃねえか！

テメエ等の臆病なツケをインデックスに押しつけてんじゃねえぞ！

1年の記憶を失うのが怖かったら、次の1年にもっと幸せな記憶を送ってやればツ

記憶を失うのが怖くないって言う幸せが待ってるって解っていれ
ばツツ

もう、誰も逃げ出す必要なんざあねえんだから！たったそれだけの事だろうが・・・・・・・・。

テメエ等は力が有るから他の人を守ってんのかよ。違うだろ、そうじゃねえだろ！！

守りたい者が有るから力を手に入れたんだろうがツ！

テメエは何の為に力を付けた？テメエはその手で誰を守りたかった？！

だったらテメエは何やってんだ！それだけの力が有って、これだけ万能力を持ってんのに何で！なんでそんなに無能なんだ！」

上条は最後の力を振り絞り 擦れた声で叫んだ。

それを聞いたランスは上条の前に駆け寄る。

そして、彼は上条の胸倉を掴む。

「言いたい事は解った。だが……『俺達』は引き下がれないんだッッ！」

ランスは怒りを込めて叫び返す。普段こんな表情はしないのに、これまでに見えなかったような表情だった。

そして上条はそれを聞き取った途端、意識を失った。

そして数秒間 沈黙が続くが

ステイルが物影からゆっくり出てくる。

「……もう良いかな。」

「……ああ、良いぜ。」

神裂はコク、と頷く。

そしてステイルは『人払い』の魔術を解いた
|
。

上条当麻（後書き）

ランス「俺って実は料理がうまかったりするんだぜ。」

ステイル「よく作るのは何なんだ？」

ランス「サバ味噌。」

神裂「・・・それも『師匠の教え』ですか？」

ランス「もちろん」

ボケと いざ決戦へ（前書き）

神裂「うっせんだよッど素人が！」

ランス「それ気に入ったの？」

神裂「いや、別にそんなんじゃないありませんが……。」

ボケと いざ決戦へ

七月二五日 — 11:55

「なあ、ステイル。」

「なんだ？」

「お前はさ、今と言うショートタイムを 後悔しているか？」

「……後悔していても、しなくても 僕にとっては同じさ。」

彼女の為に戦い、彼女の為に生きる。それだけさ。」

「……それを聞きたかったぜ。お前ってやつぱり『強い』な。」

「君には負けるけどね。」

ステイルとランスはそんな他愛の無い会話をしていた。

周りの人からすれば 青春に近い物だと思っような様だ。

「確か、ショータイムリミットは2日だったな。」

「なんで君は会話に『ショータイム』をからめるんだ？」

「口調って大事じゃねえか。」

「いまいち、僕には解らないね。」

「二日間、何すりゃ良いんだ？」

さっきまで黙っていた神裂が口を開いた。

「主に少年の監視。じゃないですか？」

「と言っても、あいつは今くたばってんだぜ？暇にも程がある。」

22:30分

「……俺らずつと此処に居るよなー（棒読み）」

「黙れこの野郎（棒読み）」

「それより眠くはないですか・・・？」

七月二十六日

$$\begin{matrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 1 \\ 2 \end{matrix}$$

「ダアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ俺ら何
やってんだッ

今日という『ショータイム』はもう終わったじゃねえーか！つか今日ですらねえし！

「何時間あの少年監視してんだよ！」

「ランス、黙れ！ 僕だって辛いんだ！」

「うつせんだよー どしろーとがあー。むにゃむにゃ・・・。」
（睡眠中）

「何言つてんだ！神裂なんかもうお寝んねだぞ！良い子は寝る時間だ この中坊がッ！」

「ついでに 今まで黙ってきたが 煙草は二十歳をすぎてからだああああッ！」

「うるさい！ニコチンとタールが無い人生なんて地獄だああああああッ！」

「うつせんだよッど素人がッ！」

「「！！」」 ビクッ

「むにゃむにゃ」

「「グボア」」 （ズッコケ）

七月二六日

8:00

「・・・おはよう・・・。」 (ダラ)

「ああ・・・おはよう・・・。」 (ダラ)

「おはようございます。」 (シャキッ)

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。どうかしましたか？何か具合でも？」

「どうせ俺なんか・・・。」 (やさぐれ)

「笑え笑え 愚かな夢 綺麗事なんて意味が無い・・・。」

「……（ダメだ。コイツ等 早く 何とかしないと……ッ）」

10:00

「師匠が言っていた……。食べると言う字は『人』が『良』なる。書くってな……。」

「それって……。」

「こつ言つ事ですか？」

人 良

「……確かにそうですね。なるほど。」

「師匠は 最大主教さまと『同じ位』偉大な人だからな。」

12:00

「ショータイムだ。」

「キャラが違くないかい!？」

「!」(テウイン)

18:00

「夕日に向かって馬鹿野郎!」

「・・・煙草がきれた・・・。」

「夕食は何にしましょうか・・・。」

19:00

「いただきます。」

「このラーメンって塩じゃないだろうね。」

「辛味噌です」

「生まれ変わる程 強 くな れる 辛味噌!! 辛味噌!!」

「ランスが最近 壊れている様ですが……。」

「ほつとこう。彼にしか解らない世界だ。」

20:00

「神裂。さっき電話してたけど、誰に電話してたんだ？」

「気にしないで下さい。単に忠告しただけです。」

「・・・大体解った。」

ピロロロロロロ

「ランス、電話が鳴ってるよ。」

「ああ、ピ もしもし。」

『ニャーランスにー。元気にしてるかニャー。』

「なんだ。ツツチー君。」

『仕事で疲れてるだろう？任務が終わったら、楽園のオススメの店を紹介してやるぜい』

「アッホ、仕事が終わったなら真っ直ぐ 最大主教様の元に戻る。

あっちに居る方が落ち着くしなあー。」

『相変わらず、ランスにーのあーくびしょっぷラヴウは凄いいぜえ』

「マニアックな言い方やめねえーか？本当にウザいから。」

『まあ、そうカッカせずに、あー——　ブチッ

「あーテンション下がった。」

「・・・貴方も土御門に色々迷惑されてる様ですね。」

「お前もか、神裂」

23：30分

「そろそろ行くか・・・。」

「そうだね。時は満ちた・・・。」

「ええ、行きましょう・・・。」

続く
――

ボケと いざ決戦へ（後書き）

ランス「眠い・・・。」

ステイル「僕だつて・・・。」

神裂「うつせんだよー どしろーとがあー。むにゃむにゃ・・・。」

ランス「だから絶対気に入ってたんだろ。」

ステイル「ほつところ・・・そして僕たちも夢の中・・・。」グー
スカ

ランス「・・・起きてんの俺だけ？」

禁書目録（前書き）

ランス「最初に言うておく、特に言う事はない！」

ステイル「短いコーナー位ちゃんとやろうよ。」

禁書目録

ランス達は、上条当麻が居るアパート前に居る。

「そろそろ、時間だ。」

ステイルが深呼吸し覚悟を決める。

ステイル先頭でドアを開け、3人は土足で堂々と入る。

そこには、上条当麻と、寝込んだインデックスが居た。

上条はランス達が来た事により凄く焦っていた。

「よう、少年。ショータイムの準備は良いか？」

ランスは滅多に見せない真面目な顔で言う。

「ちょっと待ってくれ！」

「邪魔だ。」

ステイルは上条を退かす。

そして、インデックスの様子を見る。

インデックスは苦しそうな表情で寝込んでいた。一件 普通の風邪の様な症状だが、これはもっと深刻な物だ。

ステイルはそれを見て舌打ちする。

「クロウリーの章、三章。天使を降臨させ、この部屋に神殿を築く。」

それを聞いてランス、神裂の二人はコク、と頷く。ただ静かに、覚悟のうえで。

「この娘の記憶を殺し尽くすぞ。」

「ま、待てよ。待ってくれッ」

上条は慌てた様にそれを遮った。

「この学園都市には180万もの能力者いる。研究機関だって千以上ある。そう言う所を頼って行けば、こんな最悪な方法を取らなくて済むかもすれねえんだッ

お前たちだって、こんな方法取りたかねえんだろ？心の中では他の方法はありませんか、ってお祈りしてんだろ？

だから、もう少し待ってくれ、

必ず俺が『誰もが笑って誰もが幸福な結末』を探し出してみせるからッ。」

上条は焦り 何より この方法が嫌だった。

だが、ランスが口を開く。こっちを見ずに、ただインデックスを見つめて。

「言いたい事はそれだけか？

見てみるよ……。お前はこの娘の前で同じ台詞が言えるか？

ずっと耐え続けたインデックスに、激痛で目を開けられねえ人間に、

『試したい事が有るから待ってる』なんてよお……。」

彼はただ静かに、言った。あまり感情は籠められていなかったが、何処か説得力だ有る。

ランスに続き ステイルも口を開く。

「顔の名前も解らない医者共に この娘この体を好き勝手いじらせ、薬付けにする事を良しとするだなんて……ッ

そんなのは『人間の考え』じゃ無いッ。答える！『君はまだ人間か……ッ？それとも

『人間を捨てた化け物』なのかッ？」

ステイルは懷から、金色の十字架を取り出す。

「これはあの娘この記憶を消す為に必要な道具。魔術の『霊装』だ」

上条はその十字架を見つめる。

「君の右手で触れれば、それだけで効果を失う筈だ。」

「ッッ！」

「僕らが殺すのは記憶だけだ。命は助かる。だが 君の試みが失敗したら、その娘は死んでしまう。」

それでも出来るかッ？あの娘の前で、これだけ苦しんでいる女の子の前で 取り上げる事ができるのかッ！？

そんなに自分の力を信じているなら やってみろッ！

『ヒーロー気取り』のミュータントがッッ！」

上条はそれに触れようとしたが、ステイルの言葉を聞きためらいを覚える。

それに触れれば『記憶』を消ささず済む。だが

そうすると彼女は死に絶える可能性が高い。

そんな選択の中、上条当麻はそうするしか無かった。

「クッ」

上条は悔しい気持ちでいっぱいになる。

自分の無力さに、自分が憎くてしょうが無かった。

「儀式の開始は、午前0時15分。魔術を使い記憶を殺す。

覚悟は良いな。」

「はい。」

「俺は整ってるが、お前は大丈夫なのか？」

「僕は整ってなくてもやるしか無いんだ。一々問う必要の無い。」

ステイルは黒いチョークの様な物で壁に『魔方陣』を描く。

「・・・なあ、魔術師。」

上条当麻は、部屋の壁に凭れかかり、しゃがみこんだ態勢で問いかける。

「俺はこの子に最後　なんて言ってお別れをすればいいと思う。」

「そんな下らない事に裂く時間なんて、何処にも無い。此処から消えてくれないか？」

——化け物」

それを近くで聞いていたランスは上条を見る。

（・・・哀れだ。彼のショータイムは、そろそろ終わるかな・・・。

彼は悔しがっている。何か未練が有るなら、最後にその未練を吐き放ってやりたい物だ・・・）

「君の右手は僕の炎、及んで魔術を打ち消した。どんな些細な事でも　これから行つ儀式に影響を及ぼされたくない。」

ステイルは冷徹に言い放つ。

「なんで・・・なんで俺には苦しんでるたった一人の女の子を助ける事もできないんだ・・・。」

彼は独り言に近い大きさで言った。彼は頬に涙が伝っていくのを感じた。

「・・・儀式の開始まで、まだ10分程 時間が有りますね。」

「？」

ステイルは 神裂の意味有り気な言葉に 神裂の方を見る。

「私たちが初めて記憶を消す と誓った時は一晩中あの娘の前で泣きじゃくりました・・・。」

ステイルは最初意味が解らなかったが、すぐ理解した。

彼に時間を上げてみては？と言っているのだ。

だがその意見にステイルは賛成でき無かった。

「だ、だがッ、今のコイツは何をするか解らないんだ！僕たちが目を離れた隙に心中でも図ったらどうする？！」

さっきまで黙っていたランスが口を開く。

「そうなら、さっさと十字架をぶっ壊してるだろうよ……」。

こいつがまだ人間だと 確信していたからこそ、貴方も試したんだろ？」

「し……しかし」

「その道、ショータイムが終わるまで儀式はできない。アイツの未練を残せば。儀式中に妨害される危険性が残るぜ？」

二人の説得でステイルは折れる。

「・・・ツク。 10分だ！いいなッ」

ステイルと神裂はさっさと外にでるが、ランスだけそこに残る。

「なあ、少年。お前はさ、インデックスの『ショータイム』を守る気はまだ有るのか？」

それだけを言い残し、彼もその場を去る。

外
――

3人はただ静かに『また』時を待つ。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「なあ、」

「なんだ？」

「インデックスは、また記憶が無くなったら、今回の様に逃げるの
かなって。」

「・・・・・・・・あの少年の言葉も踏まえて。幸せな記憶を与えたいと
私は思います。」

インデックスの為に、私たちの為に・・・・・・・・。」

「そうだな・・・・・・・・。」

3人はこれからの事を話し合う。

インデックスの記憶をまた消してから、自分たちがすべき事を・・
・。

「そろそろ、10分経つね・・・・・・・・。」

ステイルは目を閉じ 新しい煙草に火を灯す。

そして、夜空を見上げていた。

そろそろ時間――

3人が心の準備をしていた――

だが

突然、ドゴン、とインデックス達が居た壁が吹き飛ばされる。

3人は慌て驚き、そこに駆けつける。

急いで会談を上り、その部屋に向かう。

だが、三人は部屋に入る前に足を止める。

そこには驚愕的かつ衝撃的な現実^{リアル}が有った。

「――警告、第三章第二節。Index-Librorum-Prohibitorum 禁書目録の『首輪』第一から第三までの全結界の通過確認。

再生準備――失敗。首輪の自己再生不可能。現状、十万三千冊の『書庫』の保護ため

侵入者の迎撃を優先します。」

インデックス、いや 禁書目録が冷徹な声で言い放つ。

禁書目録の瞳に赤黒い魔方陣が描かれている。

それを見て3人は驚愕する。先にランスが叫ぶ。

「まさか・・・少年！インデックスの『首輪』をッッ」

ランスは最大主教から、禁書目録の事を詳しく聞かされている。

この空間の中で一番 禁書目録について知っているランスだけが事の重大さが解る。

「首輪？首輪とは……」

神裂が説明を求めたがランスはインデックスを警戒しながら言う。

「話は後だ！！今は、禁書目録をどうにかしないと――ッ」

「書庫内の十万三千冊より防壁を傷つけた魔術の逆算――失敗。

術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術ローカルウエポンをくみ上げます。」

彼女はまるでマリオネットの様に首を曲げる。

「侵入者個人に対して最も有効的な魔術の組み上げに成功しました。

これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します。」

ランス達はこれから起こりうる事を予想する。

禁書目録は絶対上条を潰しに掛る。と

禁書目録（後書き）

ランス「しょうねんよ
旅だゝつのならゝ
晴れたゝ日にゝ
胸をはってゝ。」

神裂「何か違う気がします。」

幻想殺し（前書き）

禁書目録編が完結します。

幻想殺し

空間に、亀裂ができる。

割れた亀裂は、血の様な赤黒い亀裂。

「そういや、一つだけ聞いてなかったっけか」

上条はインデックスに向かって言う。

「超能力者でもねえお前が、どうして魔術を使えないってわけ。」

禁書目録はめを大きく見開く

その瞬間、彼女の体が激しく、青白く発光する。

上条は警戒する。次の一手が来ると・・

瞬間——ゴツッ、禁書目録から放たれた閃光が上条目掛けて発射される。

上条は慌てて右手を前に突きだす。

幻想殺しが発動し、閃光が上下左右に分散されていく。

だが、閃光は消える事は無かった。

幻想殺しでは打ち消せきれない、力が注ぎ込まれているからだ。

さらに、良く見ると上条の皮膚がビリビリを破けてきている。魔術が右手に食い込み

ジワジワとこっちが圧されていく。

「そ、そんなまさか・・・」

「インデックスが魔術を・・・？」

ステイルと、神裂は疑問と言う疑問で頭が埋め尽くされる。

そんな中ランスは――

「すまん。今まで隠してきたが、禁書目録は脳の85%を『魔道書』では無く、『魔力』で圧迫されてんだ・・・。」

「「「！！」」」

上条含む三人は驚愕する。

「デメエ！それを知っててなんで・・・ッ」

「黙れ！命令は命令だ！それより、禁書目録をどうにかする事に専念しろッ！」

「どうって どうすりゃ良いんだ！」

「上条当麻！！インデックスを助けたいか！なら、インデックスの魔力を破壊するしかねえんだよ！」

「！」

だが、インデックス、もとい禁書目録は次の一手を繰り出そうとしていた。

「聖火ジョージの聖域は侵入者に対して効果が見られません。

他の術式へ切り替え、引き続き『首輪』の保護のため侵入者の破壊を継続します。」

閃光の威力が増す。上条が圧倒的に不利な状態だ。

そして――ステイルは歯を噛みしめる。

「Fortis931」

ステイルの修道服から 千枚、いや何万枚ものルーンのカードが飛び散る。

カードは物に、壁に、天井に張られる。

ステイルは上条の背中に手を押しつける。

「曖昧な可能性なんか要らない。あの子の記憶を消せば取りあえず

命は助かる。

僕はその為なら誰でも殺す。いくらでも壊す。そう決めたんだ。
ずっと前に……。」

ステイルは上条を倒し、インデックスの記憶を消す事により全て丸く収める……つもりだった。が

「残念ながら、曖昧な可能性じゃない。」

ランスはそう言った。

その瞬間、ヘラクセスクターがプレスレットに収まり――

「変身」

『Henshin』

マスクライダーヘラクスのスーツがランスを覆う。

『Change Beetle』

銀色のボディに閃光の光が反射し、幻想的な姿を映し出した。

「オラよッッ！」

ランス、もといヘラクスは、上条とステイルを押しつけ、閃光を受け止める。

「ぐッ————」
「たくよ、ステイル。俺が言う資格は無いが、彼女を救いたいなら、今しかないだぜ。」

マスクを付けていて外からは解らないが、『彼は笑っていた』

声は明るく、陽気だった。

莫大な閃光を受けているのに関わらず、笑い飛ばす。

「ッッ」

3人は絶句する。ヘラクスの姿にもだが、もっとも閃光を受け止めながらの何故笑っているのか？

その余裕は何処から生まれるのだと。

だが、現状 ヘラクスは余裕では無い。わずかながら体力をジワジワ奪われている。

「上条当麻、禁書目録・いや、インデックスを助けたいんだろ？」

上条は頷き、インデックスの元に走る。

「ツツ……Salvare000！」

神裂があんなに名乗りたかつた『魔法名』を叫ぶ。

そして長い七本のワイヤー『七閃』がインデックスの足元――畳を一気に裂く

足場を失った禁書目録は仰向けに倒れる。それに連れ魔方陣、閃光の上に方向転換される。

閃光が天井を突き破る。その破片は純粋な白羽となった。

閃光から難を逃れたランスがギョツとする。

「じりや・・・」ドラゴンプレス 竜王の殺息！？

伝説の聖ジョージのドラゴンと同義だ！！いくら強い力が有るとはいえ それに触れるなッ！

豪い事になるぞ！」

上条はそれを無視して、禁書目録の元へ走る。

だが、インデックスは上条より早く起き上がり、再び閃光が上条に向く。

(やばッ)

だが、

「——イノケンティウス 魔女狩りの王！」

突然上条の前に、炎の渦が現れる。

人型の炎が上条を援護し、守る。

「行け！——能力者ッ！」

魔女狩りの王イノケンティウスが咆哮をあげる。

上条はインデックスの元に走る。

「——警告。第六章十三節。新たな敵兵を確認。戦闘思考を變更、戦場の検索を開始……成功。」

現状、最も難易度が高い敵兵上条当麻の破壊を最優先します。」

閃光を上条に向けるも、『魔女狩りの王』が邪魔をする。

彼と禁書目録の距離はごくわずか。

「警告、第二十二章第一節。炎の魔術の逆算に成功。解説した十字教のモチーフフルーンにより記述した物と判明。」

対十字教用の術式を読み込み中……第一式 第二式、第三式。

命名『神よ、何故私を見捨てたのですか（エリ、エレ、レマ、サバクタニ）』」

純白だった閃光が紅く発光する。

その瞬間 魔女狩りの王が消滅し始めた。

「い、イノケンティウス！」

だが、その間に上条はすでにインデックスの元に近い場所に居た。

上条は一気に足を踏む込む。

（神様、この世界がアンタが作った奇跡システムのとうり動いてるってんな
ら――）

上条は拳を開かせる。

「まずは、その幻想をぶち殺すッッ！」

上条が禁書目録の触れた瞬間、魔方陣、亀裂、閃光全てが消滅した。

「——警。ごく・最終……章、第……零——『首輪』致命
的な、破壊……再生……不可……消」

インデックスはボタン、と倒れる。

上条は安心した——その時

一枚の純白の羽が上条の頭に落ちる。

上条はそのままバタリと倒れた。

そして、上条は一度目の死を迎える。

幻想殺し（後書き）

ランス「やっと完結したな！」

ステイル「あまり納得いかないけどね。」

神裂「インデックスが救われて何よりですよ

ライダーの影（前書き）

ランス「なんだお前」

ワーム「キシヤ~~~~」

ランス「死ねッ」

ワーム「キャインッッ」

ライダーの影

七月二十七日

8:00

「結局、あの少年君は命に別条ナッシングだ。そしてインデックスの面倒も見るのもあの少年っておちでした〜」

「それより、ランス。インデックスの件で話がある。」

ステイルの声には怒りと呆れが籠められていた。

「君はインデックスの事について全部知っていたようだが・・・。

なんで、黙ってたんだッ？」

ランスはキョトンとした顔で答える。

「俺が機密事項を人に言いふらす馬鹿だと思うか？」

「・・・チッ」

ステイルは煙草をギリギリと歯で噛んでいる。

「あと、ランス」

「なんだ？」

「あの姿はなんですか？」

「あゝあれね。俺が『世界を渡る力』を持つてるのしってるよな？」

「え？ええ。」

「違う世界で『頑張つて』手に入れた物だ。このプレスレットと虫クンはただの玩具じゃ無いって事。」

「・・・凄く『チート』ですね。」

「大丈夫、公式だから。うんうん」

「さて、じゃあ、帰るとしますか？」

その様子を見つめる二つの影があった。

「流石は俺の弟子と言った所だな。どうだ？加賀美。」

「なんでお前の弟子は皆あんな個性的なんだ？」

「おばあちゃんが言っていた。個性があるからこそ人。個性が無い人間なんて居ないってな。」

「それより、俺等どうするんだ？いきなり『違う世界に行ってワームを倒せ』だなんて・・・」

「俺達はイギリスのワームを担当する。お前も来い。」

「だって、お前死んだじゃ・・・。」

「剣は、生き返った。」

「・・・。。。」

ライダーの影（後書き）

天道「おばあちゃんが言っていた。

俺は世界そのもの。

世界がある限り、俺がある！」

加賀美「お前はいつも自己中心的だな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0510r/>

とある仮面の必要悪の教会（ネセサリウス）

2011年10月8日17時24分発行